

# 江戸期における農兵論の系譜

—— 熊沢蕃山と荻生徂徠 ——

折 原 裕

はしがき

第1節 熊沢蕃山の抑土的農兵論

第2節 荻生徂徠の抑商的農兵論

むすびにかえて

## はしがき

江戸期における経済思想の展開を垣間見て気付かされることは、経済思想の展開を担った論者の多くが、武士階級に所属していたということである。彼ら論者の多くは、政治的支配階級である武士の一員という立場から、経済思想を紡いだ。彼らにとって、経済の問題は、政治の問題の一環であった。江戸期の経済思想が、支配階級による経世済民の思想という性格を強くするのも、そのためである。

ところで、武士階級の立場からするなら、江戸期における最大の経済問題は、武士を生活の窮乏からいかにして救済するか、という問題だった。それゆえ、江戸期の経世済民思想は、しばしばたてまえに過ぎず、事実上、経世済士を主内容とする場合も多かった。

兵農分離の結果、都市生活者となった武士は、農民から直接に収奪した米を、米市場を媒介に貨幣に換え、その貨幣を、商品市場を媒介に生活手段に換えることによって、消費生活を営んだ。だから、彼らは、言わばイ

ンプットとアウトプットの両面で、商品経済にからめ取られていった。このような、武士の都市居住という条件下で、都市商業は急速に発展し、大商人の台頭をみることになる。その一方で、武士は、農業からの収奪に限界があったから、消費生活の拡大と、生活手段の高騰によって、窮乏化せざるをえなかった。

このようなわけで、江戸期における、武士の手になる経済思想の大部分は、武士の窮乏からの救済を、最大課題とすることになった。小稿で取り上げる、江戸期の比較的初期からほぼ中葉にかけて展開される、農兵論の場合もその例外ではない。農兵論とは、武士を知行地に帰農させることによって、武士の消費支出を押さえ、それによって武士を窮乏から救済しようとする議論である。それゆえ、それは、武士を商品経済から遠ざけ、また商品経済自体を縮小しようとする、方向性を持っている。そうした方向性において、農兵論は、商品経済に否定的である他ない存在である。

したがって、農兵論は、往々にして、商品経済に対する無理解を示すものとして、商品経済固有の運動を認識しようとししないものとして、批判されてきた。そして、その批判は大筋では正しいのであるが、そこには、なお残る問題があるように思われる。つまり、商品経済を否定して、自然経済に復帰しようという、そういう大層なプランが、複数の論者によって、かなり長い時期を通じて、なぜ繰り返し議論される必要があったのか、ということである。

私見によるなら、農兵論は、むしろ、商品経済についての認識がある程度進み、商品経済と、武士という支配階級の存在形態と、両者の矛盾が明確になって、初めて意味を持つ議論である。だからまた、私見によれば、農兵論が登場することこそ、江戸期における、商品経済認識の第一歩であり、農兵論の登場以前には、商品経済認識はまだ混沌としたものだった。商品経済が、政治的支配者階級である武士の手中にあると観念されている限り、商品経済は、認識されたことにはならない。逆に、商品経済が、武

士的手中を逸したと観念され、武士にとって桎梏と意識されたとき、商品経済は、一応認識されたことになると考えられるのである。

以下では、こうした論点を視野に置きつつ、熊沢蕃山と荻生徂徠の農兵論について、簡単にながめてゆくことにしよう。

## 第1節 熊沢蕃山の抑士的農兵論

### 1

熊沢蕃山は、元和5年（1619年）、京都に生まれた。<sup>1)</sup>父野尻一利は、浪人として京都に仮住いの身であり、蕃山は、3男3女のうちの長男だった。8歳のとき（数え、以下同じ）、母方の祖父である、水戸藩士熊沢守久の養子となっている。16歳のとき、推薦してくれる者があって、岡山藩主池田光政に仕えるようになる。この頃の蕃山は、身体を鍛え、武術を磨き、武人としての修練に専心したと伝えられている。

蕃山が20歳のとき、幕府は、江戸に参勤していた池田光政に、前年に起こった島原の乱への出兵を命じた。光政は、急ぎ岡山へ戻ることになったが、光政に従っていた蕃山は、まだ元服前との理由で江戸に残されることになる。もっぱら武人としての修練に励んでいた蕃山にとって、これは承服し難い処置だったようで、彼は、自ら前髪を切り落として元服とし、岡山に帰って、従軍を願い出た。だが、岡山藩が出兵を実行に移す前に島原の乱は平定され、蕃山の願いは実現しなかった。蕃山は、これをきっかけに、岡山藩を致仕している。藩命を無視して江戸を離れた罪により追われたという説と、逆に光政が登用しようとしたので学問の未熟を恥じて自ら辞したという説がある。いずれにせよ、蕃山が本格的に学問に取り組むのは、これ以降のことであった。

岡山を去った蕃山は、鍋島藩の兵として島原の乱に参戦し負傷した父

が、母や弟妹とともに身を寄せていた、近江国蒲生郡桐原村にある父方の祖母の実家である、伊庭家に移り住んだ。この近江在住の時期、蕃山は、貧窮の中で、学問に熱中し、病気になるほどであったという。23歳の秋、中江藤樹を訪ねて入門を請うが、初めは許されなかった。この頃藤樹は、伊予大洲藩を辞して、郷里の近江国高島郡小川村に戻り、書を講じていた。蕃山が、冬に再び藤樹の下に出向き、入門を強く請うと、藤樹は、蕃山の熱意に負けて、やっと入門を許可した。翌年春までの短い期間ではあったが、蕃山は藤樹からむさぼるように学び取ったという。また、藤樹も蕃山を莫逆の友として遇したらしい。こうして、蕃山の学問は大いに進んだが、生活の窮迫は一向に好転しなかった。

そうこうするうち、蕃山一家の貧しさに同情し、間を取り持つ人があって、蕃山は、27歳のとき、岡山藩に再出仕することになった。2年後、蕃山の学識が藩主池田光政に評価され、彼は、知行300石の側役に取り立てられた。そして、さらに3年後、32歳のときには、知行3000石の鉄砲番頭〔ばんがしら〕を命じられている。このように、蕃山が破格の厚遇を与えられたのは、藩主が中江藤樹の学を強く信奉していたためで、同じく藤樹の教えを受けた蕃山の弟も、岡山藩に取り立てられ、後年学校奉行を命じられている。この他にも、中江藤樹の息子や、蕃山の妹婿など、蕃山に縁のある者が相次いで岡山藩に取り立てられた。こうして、蕃山の藩内での影響力は高まったが、その反面蕃山への反感も醸成された。家老のひとりが蕃山を批判し、藩主が蕃山を弁護するという一幕もあった。蕃山の人物像については、必ずしも明らかではないが、齒に衣着せぬところがあったようで、後に池田光政と不和になるのも、その辺りの事情によるものらしい。

光政の参勤に従い、江戸に出府した折には、紀州徳川頼宣や、老中松平信綱など、多くの有力者と親交を結んだから、蕃山の名声は全国的なものになった。そうした名声への嫉みも手伝ってであろう、由比正雪、丸橋忠

弥らによる慶安事件が起こると、幕府の朱子学者林羅山は、事件の背後に蕃山の言説の影響があると主張した。大老酒井忠勝が朱子学びいきだったこともあり、この頃以降、幕府は蕃山に度々圧力をかけるようになる。

蕃山36歳のとき、岡山藩領内では大洪水があり、次いで凶作・大飢饉が発生した。この災害の復旧と被災民の救済のため、藩主光政は陣頭指揮に当たったが、これを補佐したのが蕃山であった。藩は、藩庫を開放して米を放出し、不足分は他国から買い入れたり、大坂蔵屋敷の蔵米を返送したりして、救済米を確保した。また、上方町人などから多額の借金をして、救済金に充てた。藩士たちの知行収入が大幅に削減されたため、窮迫する藩士も出たが、そのうちの希望者には、知行地に在住することを許可した。これは、蕃山の提唱する農兵制の部分的実施と言ってよい。このような藩の施策は、「百姓ばかりを大切にする」との不満を、藩士たちの一部に生ぜしめたが、藩主はこうした不満に対して、農民が耕作に専念できねば君臣町人の生活も成り立たない旨、諭したという。

38歳のとき、狩りに出ていた蕃山は、崖から落ちて負傷した。軍務に堪えられないとして致仕を申し出たが、嗣子がないとの理由で許可されなかった。このとき、妻いちとの間に2女があったが、男子はまだなかった。そこで、藩主池田光政の三男政倫を池田姓のまま養嗣子として貰い受け、職禄を政倫に譲るということで退任を許された。池田政倫は、後に父光政が隠居した際に1万5千石を分地されている。

退任後も蕃山は、岡山藩の藩政に献策を続けて、採用されることもしばしばであったが、藩政に対する厳しい批判も行なったから、次第に藩主光政に疎まれ、やがては光政に嫌悪されるまでになってゆく。蕃山は、43歳のとき、京都に移り住み、公家や文人との交際を楽しんだが、やがて幕府の意向によって京都を追われ、51歳のとき、明石に移住した。蕃山がもっとも著作に専念したのが、この明石在住時代で、『集議和書』などの主要著作は、この時期に書かれている。蕃山61歳のとき、蕃山の身柄を預かるよ

うな格好になっていた、明石城主松平信之が、大和郡山へ転封になると、蕃山も松平信之とともに、大和郡山に移った。蕃山67歳のとき、松平信之は、下総国古河に転封になり、その2年後には、蕃山も古河に招かれた。この招きは、幕命によるものであった。古河に到着した蕃山は、69歳の身で、軟禁されてしまう。この頃蕃山が行なった、農兵制を含む幕政改革の主張が、幕府を不愉快にさせたものらしい。交通・通信を禁止されただけで、生活に不自由はなかったが、翌年妻を亡くしたこともあって、寂しい晩年となった。蕃山は、元禄4年（1691年）、73歳で世を去っている。

## 2

熊沢蕃山の農兵論の根底をなすのは、当時、米作農民に対して課されていた、5公5民ときには6公4民という公租が、あまりにも高率に過ぎるという主張だった。蕃山の認識によれば、「近年ほど高免〔こうめん、高税率〕なる事は古来聞かざる事<sup>2)</sup>」であり、異常事態であった。こうした高税率を緩和し、なおかつ武士階級を窮乏から救うことこそ、蕃山にとって、当時の為政者のなすべき最重要政策課題だったのである。

しかし、蕃山によれば、商品経済的な米市場のメカニズムが、そうした最重要政策課題の実現を困難にってしまう。蕃山が考えるには、米が豊富になればなるほど、米市場メカニズムによって決定される米価は、下落せざるをえない。だから、たとえ武士の現物収入が増加しても、かえって貨幣収入は減少してしまう。だからまた、米が豊富になっても、武士は窮乏から脱することができないし、高税率を緩和することもできない。こうして、蕃山は、次のように言うことになる。「近年豊年ゆえ、武士も民〔農民〕もますます困窮す。士民つまりたればあきないなし。工商もまた困窮す。〔……〕この惣詰まりは、米少し多くなりたるゆえなり。〔……〕近年世の中悪しからで売り米多ければ、天下の困窮となりたるにて知るべ

し。<sup>3)</sup>」

このように、蕃山は、米が豊富で、米価が低廉であることが、武士や農民などの困窮の原因であるとし、そうした困窮を、言わば米市場メカニズムの矛盾として把握するのである。そして、蕃山の場合、こうした把握が、直ちに米市場メカニズムの否定を導き出すことになる。蕃山は言う。

「今は金銀錢の通用なるゆえ、米を売らでは公役も何も調おらず。このゆえに大坂・江戸の津にては、売り米のみ満ち満ちて買う者少なければ、下値になりて、諸人困窮す。〔……〕米の値段を錢のごとく定めて、京・大坂・江戸・諸国共に諸色を米にて売り買いし、呉服所をはじめて、米にて渡さば、その下の職人にも米にて渡し、諸物米にて買うべし。<sup>4)</sup>」

ここに見られるのは、いわゆる「米使い」の経済への復帰の主張であり、金使いの経済の否定である。蕃山が、こうした自然経済への復帰、商品経済の否定に進まざるをえないのは、蕃山の商品経済に対する認識の遅れを示すものでは必ずしもない。むしろ、蕃山が商品経済を否定せざるをえないのは、彼において、商品経済が、もはや武士階級の政治的な支配力を越えた存在として、政治のコントロールに服さないものとして、いち早く意識されていたことを示すものであろう。つまり、蕃山の場合、商品経済の自律性認識が、もちろんきわめて不十分な形ではあろうけれども、たぶん萌芽としてあるのであって、そのことが逆に、商品経済の否定を主張させる関連になると思われるのである。

こうした関連は、たとえば、蕃山と同時代人の山鹿素行（1622～1685年）の場合には、決して見られないところなのである。素行の場合、経済は、おしなべて政治の一部として理解されており、だから、商品経済もまた、政治の発動によっていかようにもコントロールされうるものと考えられていた。<sup>5)</sup>それゆえ、素行は、経済問題にはいたって楽観的な立場を取ることになる。農兵論のような改革論も、素行の唱えるところではなかった。

だから、蕃山の次に見られるような農兵論は、当時としては、かなりユ

ニークなものだったろう。「かくのごとく高免になりて、民の悴〔かじけ、疲れやせ〕たるは、士と離れたるゆえなり。士の在々に在付くようにすべし。また士の心得にも、この後子々孫々生死を共にする譜代の民なれば、民の為悪しからぬようにたしなむべし。軍役は民をつれて出る事なれば、常に人を多くはかかえ置かず。二つ成〔2割の税率、当時は五つ成が普通〕三つ成にても足るべし。〔……〕少しづつの手作りすれば、菜園の草を取るようになる事、なぐさみの養生に下人の手伝いし、山野に猟し、川沢に漁し、風雨霜雪をいとわず、文武の芸をつとめ、君の干城〔かんじょう、たてと城〕となるべき武夫ならん。〔……〕子々孫々にいたりては、士共に作人となりて、十一〔といち〕の貢ぎに帰すべし。』<sup>6)</sup>

上に見られるように、蕃山の農兵論は、武士の帰農によって、武士の貨幣支出を減少させることを主眼としていた。この点で、蕃山の農兵論は、後述する荻生徂徠の農兵論や、徂徠の弟子である太宰春台の農兵論の、ひな型の位置を占めるものと言ってよい。蕃山の農兵論が、それらと異なる特徴は、武士の帰農による貨幣支出の減少を、農民に対する高税率の緩和に役立てようとする点。そして、蕃山の農兵論が、単に、経済的な観点だけではなく、軍事的な観点をも合わせ持つという点である。前者は、蕃山のいわゆる「土農一体」<sup>7)</sup>という考え方からくるものであろう。また、後者は、蕃山が江戸時代の比較的初期の思想家であったこと、蕃山にとって、武士は、政治の担当者であるばかりではなく、軍事の担当者でもあったこと、こうしたことからくるものであろう。

いずれにせよ、蕃山は、商品経済の及ばない場としての、自然経済的農村に武士を立ち帰らせることによって、武士を困窮から救おうとしたのである。そこに、蕃山の、商品経済と武士との関係についての見方を、汲み取ることができよう。蕃山の見方からすれば、商品経済は、そもそも武士の生活になじまないものであり、また武士の政治的支配力を越えて武士を困窮させるものであった。だからこそ、蕃山は商品経済を否定しようとする



るのだが、それは、蕃山が商品経済の性格を認識しなかったからではなく、むしろ、彼なりに認識した結果だった。

とは言え、蕃山の商品経済認識が、当時の通例の観念によって、強く制限されたものだったことも事実である。蕃山の認識は、農本商末という観念によって、制限されているのである。

蕃山の農兵の主張は、農兵の制を採用することによって、ただ武士の貨幣支出の減少だけを目指すのではなく、同時に農業生産力の増大をも目指すものであろう。先に引用した蕃山の言葉の中で、「少しづつの手作りすれば……」というくだりでは、武士が農業に従事することによる、一定程度の農業生産力の増大も期待されているはずである。ところで、武士がそのように農業に従事してよいのなら、武士が工業や商業に従事してよいと考えることも、少なくとも議論としてだけならば、可能であろう。そして、武士が、工業や商業、とりわけ商業に従事してよいと考えるとする、その考えが、もっと江戸時代の後の時期に主張された、重商主義論になることは明らかである。

海保青陵や、本多利明に始まり、佐藤信淵を経て、横井小楠にいたる、江戸期における重商主義論の展開については、別稿<sup>8)</sup>ですで見したが、農兵論と重商主義論との間には、意外な親近性があるのである。重商主義論もまた、武士の窮乏からの救済を最大の眼目としていたし、生産力の増大を重要な論点として含んでいた。両者の相違は、農兵論が、商品経済を否定する方向を取るのに対して、重商主義論が、商品経済を肯定する方向を取る点にある。それゆえ、商品経済が発達すればするほど、農兵論は非現実性を増し、相対的に重商主義論の現実性が増すことになる。したがって、江戸時代の中ほどに近づくにつれ、農兵論が次第にすたれ、重商主義論が台頭してくるのは、偶然ではない。その転換は、まさに農兵論が重商主義論に取って代わられる、そうしたトレード・オフの関係を示すものなのである。

このように考えるとすれば、蕃山の農兵論の限界も、おのずから明らかであろう。蕃山の農兵論は、それがまさに農兵論にしかならないところに、工兵論や商兵論にならずに、進んで重商主義論にならないところに、根本的な限界を有することになる。「農が本にて、工商は農を助くるものなり<sup>9)</sup>」という蕃山の言葉は、江戸時代の経済思想家の間ではありふれた、農本商末の思想を表明したものに過ぎない。だが、蕃山の場合、そのありふれた思想が、彼の経済思想の最重要部分の質を規定し切ってしまう。そして、蕃山の場合、商品経済についての認識は、武士の政治力では制御しえない、武士にとって否定さるべきもの、という以上に大きく出るものではなかったのである。

### 3

蕃山の農兵論は、農本商末思想に強く規定されたものではあったが、それは、後出の荻生徂徠の農兵論のように、抑商的な性格は持っていなかった。徂徠の農兵論は、農本であるがゆえの農兵の主張と、商末であるがゆえの抑商の主張と、両者を兼ね備えていた。その意味で、徂徠の農兵論は、文字通りの農本商末思想であった。これに対して、蕃山の農兵論では、商末思想に由来するはずの抑商の主張は、きわめて弱いものとなっている。

確かに、「粟〔ぞく、穀物〕をもって諸物に換うる事次第にうすくなり、金銀錢を用うる事専らなる時は、諸色次第に高値になりて、天下の金銀商人の手に渡り、大身・小身共に用不足するものなり<sup>10)</sup>」という発言は、蕃山のものである。しかし、蕃山の思考の基本線は、あくまで、「士困ずれば民〔農民〕に取ること倍す〔……〕士・民困窮する時は、工・商の者粟に換うべきところを失なう<sup>11)</sup>」というところにあった。だから、蕃山の場合、抑商の主張は、原則的に含まれないし、含まれたとしても、それは、「ただ

大商のみますます富有になれり<sup>12)</sup>」という言葉からうかがわれるように、大商人のみを意識したものだったと思われるのである。

では、蕃山の農兵論が、抑商的であるよりも、勸農的であったと特徴付けてよいかとなると、実は、そこにも問題がある。なぜなら、蕃山が、新田の開発に消極的であったという事実があるからである。

蕃山が新田開発に消極的だったのは、新田開発は、工事による旧田のつぶれを伴ない、往々にして、旧田の耕作農民に犠牲を強いるものであったこと。また、新田となるべき土地は、多くの場合、入会地として、薪炭や肥料や牧草の供給源として役立っており、そうした場合にも、新田開発は、犠牲を発生させずにはおかないこと。こうしたことが、理由だった。だから、蕃山は言う。「新田畠は、多くは古地の害になるものなり。隣郷の害になるもあり。国に不毛の野山多きは、牛馬を養うに頼りよく、薪を取るによきものなり。新田またこれらの害になるものあり。」<sup>13)</sup>

蕃山においては、新田開発は、自然経済の前提条件のひとつである、入会地の存在に対立するという意味でも、奨励されるより、むしろ抑制されるべきものであった。こうした文脈からすれば、蕃山が新田開発に消極的だった点は、「自然経済社会への復帰という復古的方策が、一貫してつらぬかれている<sup>14)</sup>」と評価されてもよい。ともあれ、このように新田開発に消極的では、蕃山の農兵論を、勸農的と特徴付けることは困難であろう。

蕃山の農兵論は、思い切った改革の提唱であり、「当時としては破天荒な主張<sup>15)</sup>」であったが、蕃山本人は、犠牲者をできるだけ出さないような方策を用意しようとしたのだった。蕃山の農兵論は、抑商的でないから、商人に犠牲を強いることもなく、また、むやみな新田開発によって、農民に犠牲を強いることもなかった。さらに、彼の農兵論は、「藩の行政組織の簡素化をはかるについて禄をもらっている武士から一人の犠牲者も出さず、そればかりか浪人もすべて救済するという仁政願望に制約されている<sup>16)</sup>」という面も持っていた。要するに、蕃山の農兵改革は、犠牲者を出さない改

革として構想されていたのである。

しかし、事実上、蕃山の農兵改革にも、犠牲者は予定されていた。それは、他ならぬ武士であった。蕃山は、当時の時代状況の中で、概して、武士に厳しい目を、農民に同情的な目を向けていた。たとえば、次の言葉がそれを示している。「今の世の武士の情は、民に不仁なるをもって、その道を得たりとし、仁なるをば、その道を得ずとす。たまたま民に憐れみある人あれば、大いにそしり怒りて、慈悲に過ぎて、百姓のみを恵み、家中にはおろそかなり。事あらば百姓のみ用に立つべしとあざけり〔……〕。<sup>17)</sup>」こうした見地は、おそらく、岡山藩での経験によってつちかわれたものでもあろう。

蕃山の提唱する農兵改革の目標は、先の引用にもあったように、「十一の貢ぎ」すなわち10分の1税の実現にあった。この「十一の貢ぎ」は、10分の1の税率であったという中国古代周の時代を理想とするもので、儒学者の言わば共通認識としての理想像であった（典拠は『孟子』にある）。蕃山は、この理想に忠実であろうとしたわけである。だからこそ、蕃山の場合、武士の帰農は、「士共に作人となりて」というようにイメージされざるをえない。蕃山にとって、武士の帰農は、都市生活で惰弱になった武士を鍛え直すという意味をも担っていたから、「士共に作人となりて」という帰農は、武士に必要なものとも考えられている。蕃山が次のように述べるのも、そうした考えによる。「武士農を別れてよりこのかた、身病気に手足弱くなりぬ。心ばかりは勇むとも、敵にも会わで疲るべく、病死すべし。〔……〕これは軍用の損なり。平生も農兵ならざれば風俗悪しくなりて長久ならず。農兵の昔に返すべきはこの時なり。<sup>18)</sup>」

しかしながら、大部分の武士にとって、蕃山の提唱する農兵改革は、とんでもない迷惑な話であったに違いない。それは、松浦玲氏の言葉を借りればこう表現できる。「たしかなのは、十七世紀に蕃山が貢租を十分の一に減らすための策を立てたとき、幕府も、武士層一般としても、それをや

るつもりが全くなかったことである。そして、その理由はきわめて簡単であって、十分の五なり十分の六なりの貢租を現実に収奪できており、それを基礎に重層的な支配機構をとにかくも運営できているのだから、儒教や儒学者や『孟子』に義理立てして貢租を十分の一にするための途方もない苦勞をしてみる気など、起こらないのが当然だろう。<sup>19)</sup>」

つまるところ、蕃山の農兵論は、蕃山自身の意図はともかくとして、武士を犠牲にするという性格を持っていたのである。この意味では、蕃山の農兵論は、表現に問題がないわけではないが、抑土的農兵論と呼ぶことができよう。だが、そのように支配者階級たる武士に犠牲を強いるような改革が、武士の手によって実現される可能性は、当然のごとくない。蕃山の農兵論が「空想的な色彩をおびている」<sup>20)</sup>理由も、ひとつにはここにある。

岡山藩が災害にみまわれたとき、武士の帰農が部分的に実施されたことは、先に触れたところである。また、蕃山がそれに先立って、武備を目的として、自分の家来を要害の地に住まわせ、耕作もさせる試みを行なったこともあったらしい。<sup>21)</sup>さらに、蕃山が藩を去って以降も、生計の困難になった藩士を一時的に知行地に返す方策は、岡山ではしばしば行なわれた。<sup>22)</sup>しかし、そうした帰農は、一時的、例外的な措置に過ぎない。蕃山の農兵改革は、より恒久的、一般的なものであって、蕃山や岡山藩の一連の経験を大きく越え出るものであった。それは、初めから、経験的な意味での、実現可能性を考慮しない提案であったのかも知れない。

蕃山の農兵改革は、蕃山自身の感じ方としては、武士のためにもなることだった。しかし、それは、実際には、武士に大きな犠牲を強いる改革であった。彼が、結局のところ、彼の生きた時代を、武士としてまっとうできないで終わる理由も、まずはそこにあることになる。武士らしくあろうと強く願ったであろう彼にとって、皮肉なことであった。

## 第2節 荻生徂徠の抑商的農兵論

### 1

荻生徂徠は、寛文6年（1666年）、江戸に生まれた。<sup>23)</sup>父は町医であり、母は旗本の娘であった。徂徠が6歳のとき、父は、当時上州館林城主だった、徳川綱吉の側医となった。徂徠は、5歳の頃から読書に親しみ、9歳で作詩を試み、12歳で林家に入門している。14歳のとき、父が咎めを受け、館林の国医に左遷された（理由は不明）。ほどなく父は、館林国医を許可なく辞し、江戸に戻った。これは、武士社会では罪になる。こういう経緯で、徂徠一家は、母の実家の所領のある上総国長柄郡本納村（千葉県茂原市本納）に移り住んだ。薄禄を与えられて逼塞といったところだったらしい。以来11年間、徂徠は江戸から離れ、貧しい生活の中で、自学自習に励んだ。なまじ師匠を持たないゆえに、自由闊達で批判精神に満ちた徂徠学の下地が作られたと言われる。

徂徠25歳のとき、父が、すでに5代将軍になっていた徳川綱吉から赦免され、綱吉の側医に復職した。父とともに江戸に戻った徂徠は、しかし、父の下で暮らさず、芝増上寺の門前で学塾を開いた。最初は門人も少なかったから、徂徠の生活は貧しかった。貧乏のひどさを見かねた豆腐屋が何かと徂徠の世話をやき、後に徂徠が恩に報いて扶持米を与えたという言い伝えがあり、落語の「徂徠豆腐」のテーマにもなっている。27歳のとき、学塾での講義を口述筆記でまとめたものができ、これが写本として流布すると、それを契機に、徂徠の学名は次第に高まってゆく。

31歳のとき、将軍綱吉の側用人で、後に老中となる柳沢吉保（当時の名は柳沢保明）に仕えることになった。主君吉保は、その頃川越7万8千石を領し、後には甲斐15万1千石を領した。徂徠も、加増を重ねて、44歳で致仕したときには、禄高400石に達していた。柳沢家の儒者としての徂徠

の仕事は、吉保に儒学書を講義することだったが、吉保自身儒学書への造詣が深く、和音で読み下すのではなく、華音で直読することに興味を持っていたから、すでに古文辞学を志向していた徂徠にとって、この仕事は好都合な面があった。しばしば柳沢邸を訪れる将軍綱吉の相手をするのも、徂徠の大事な役目だった。伊藤仁斎に書面で教えを請い、病中の仁斎に黙殺されて激怒したというひとこまも、この柳沢家に仕えていた時期の出来事であった。

徂徠44歳のとき、将軍綱吉が死去すると、柳沢吉保は失脚し、六義園に隠棲することになった。徂徠は、吉保に引き止められたが、強いて致仕し、柳沢の藩邸を出て、日本橋茅場町に私宅を構え、再び学塾の主となった。しかし、この学塾は、かつての芝増上寺門前のものとは異なり、隆盛を誇った。太宰春台を初め、高名な弟子も多く育っている。徂徠は、柳沢吉保の特命により、柳沢家から旧来通り400石の禄を貰っていたから、月に数回は学術指南のため柳沢家に出掛けねばならなかった。

その後、徂徠の学塾は、牛込、赤坂神楽坂、市ヶ谷大住町に移転を重ねながら、多くの門人を世に出した。徂徠自身の著作活動も進み、徂徠の古文辞学の代表作が生まれた。

徂徠は、6代将軍家宣や7代将軍家継の時代には、幕政に深く関与する学者として新井白石がいたこともあって、幕府と関係を持たなかったが、吉宗が8代将軍になると、『六論衍義』の翻訳を発端にして、幕府の御用をたびたび言いつかるようになる。ただし、かつての新井白石ほど、政治に深く関わることはなかった。『政談』に代表される、徂徠の経世論に関する著作は、この享保年間、吉宗の時代に書かれている。62歳のとき吉宗から仕官するよう求められるが、徂徠は、病気を理由に断った。将軍の求めを断るのは、当時としては大きな問題になる恐れがあったが、幸か不幸か、翌年1月に徂徠が病没したので、この問題が実際に大きくなることはなかった。

徂徠は、肺病持ちだったから、病氣と闘いながらの学究人生だった。撰生に努め、酒はほとんど飲まず、夜ふかしも慎んで、弟子と話をしている途中でも、四つ時（午後10時）には就寝したという。徂徠は、二度妻をめとっているが、二度とも早死にされ、子供も何人かもうけたが、ことごとく病没したらしい。弟子には恵まれたが、家庭的には必ずしも恵まれなかった人生であった。

## 2

荻生徂徠は、『政談』の冒頭を、次のような言葉で書き始めている。「総じて国の治めと云うは、たとえば碁盤の目を盛るがごとし。目を盛らざる碁盤にては、何ほどの上手にても碁は打たれぬなり。」<sup>24)</sup>ここで徂徠が「碁盤の目」と言うのは、為政者が上から定める制度のことである。したがって、「目を盛る」とは、制度の整備を意味する。徂徠の考えでは、武士の窮乏を初めとする、当時の政治課題は、すべて制度の不備によるものであった。たとえば、庶民の間に奢侈がはびこるのも、制度の欠如によるというのが、徂徠の見方なのである。

徂徠は、こう言う。「制度立たざるときは、その数おびただしき賤人がその数少なき良き物を使い用いるゆえに、事足らずして、物の価も高値になる。〔……〕かねて制度を立てこれを守らするときは、人々その節限・分量を知るゆえ、分に過ぎたる奢りは自然と無くして、世上に費えなし。

〔……〕華美を好むは人情の常なるゆえ、制度なければ世の中次第に奢りになりゆくなり。」<sup>25)</sup>つまり、少し敷衍して言うなら、衣服ひとつとっても、身分に応じた服装がなされるよう、制度で締め付ければ、身分違いの奢侈は押さえられるから、身分の高い者が身に着ける衣服の価格は、需要の減少によって下げられるというのである。ここに見られるのは、自然成長的な商品経済の発達と、それに伴う需給構造の変化を、強権で無理矢理押



し戻そうという、強い意志である。そして、その意志の向かうところが、身分の低い者を犠牲に、身分の高い者を救うところにあったことは、言うまでもない。

「とにかく金さえあれば賤しき民も大名のごとくにしても、何の咎めもなし。ただ悲しきは、金を持たず、手前悪ければ、高位・有徳の人も自ずと肩身すばまりて、人に蹴落とさるる今の世界なり。」<sup>26)</sup>このような徂徠の嘆きは理解できなくもない。このように嘆かざるをえないほど、徂徠の時代は、蕃山の時代と比較して、商品経済の急速な進展が、武士の窮乏に一層の拍車をかけていた。徂徠自身の観察によっても、「それがしが覚えても五六十年前よりただ今までの間、世の風俗移り行くにしたがいて物の値段の高値になること、二十倍にも及ぶべし」<sup>27)</sup>という、大変動があった。蕃山の見た時代と、徂徠の見た時代との間には、大きな隔たりがあったと言わべきだろう。

それゆえ、徂徠の危機意識は、並大抵のものではない。それゆえまた、儉約令のような小手先の制度は、徂徠の推奨するところではなかった。

「過ぐる昔をもって移り行く後を考えるとときは、この以後もまた世の移り行くにしたがいて、世間ますます詰まり行かんこと、これまた過ぎ去る昔より段々当時の様になり下りたるごとく、次第に悪しくなり行くべければ、当時に定め置きたる御儉約の格は、末永き格とならざることなり。」<sup>28)</sup>すなわち、徂徠が感じ取っていたのは、歴史の巨大な流れであり、彼が目指したのは、この巨大な流れをせき止めることであった。

徂徠は、そのように、悲壮とも言うべき強い危機意識を持って、強権の発動による大改革を提案した。その内容は、必ずしもひとつに括りうるものではないが、彼の改革案の中心にあったのが、農兵論であったことは間違いない。「これみな武家旅宿の境界にて、制度なき世界ゆえ、知行の米を売り払いて金にして、商人を頼みて用を足さねば今日が立ち難きゆえなるによりて、商人の勢い盛んになりより、自然と商人に権を取られて、かく

のごとく町人に極楽は出来ることなり。<sup>29)</sup>」徂徠によれば、武士が「旅宿の境界」にあること、つまり知行地を離れた都市生活者であること、それゆえに、武士が商品経済を前提として生活せざるをえないこと、こうしたことが、制度の欠如の最たるものなのである。

したがって、徂徠の言う制度の整備は、享保当時の商品経済社会の発達状況を前提に、制度の不備を補うというようなものではなく、当時の商品経済社会そのものを否定して、経済を新たな制度の下に服させることであった。それは、同時に、商品経済固有の運動や法則の認識を、拒否するものと言ってよい。ここから、「徂徠の特徴は〔……〕『経済の未発見』にある<sup>30)</sup>」という、論評も出てくることになる。徂徠が、まさに、商品経済を否認し、農兵制による自然経済への回帰を説く以上、この論評には十分な理由があると言わねばならない。

しかし、蕃山においてもそうであったように、徂徠においてもまた、商品経済の否定は、むしろ、商品経済が政治の制御を越えるという意識の、萌芽的ではあるにしても商品経済の自律性認識の、反映とみなされうるのである。蕃山の場合は、商品経済の否定は、10分の1税という理想像と結びついており、それほど切実なものではない。ところが、徂徠の場合、商品経済の発達に伴う武士の困窮の程度がはなはだしく、そこからの武士の救済が急務だったから、商品経済の否定は、きわめて切実なものになる。同じ農兵の提唱をしながら、蕃山の主張する「政策内容は穏健<sup>31)</sup>」であるのに、徂徠の主張する政策内容が穏健さを欠くのも、この辺りの事情による。

ともあれ、徂徠の考えでは、物価の騰貴も、また商人がのさばるのも、「旅宿」の弊害なのであった。だから、徂徠が、蕃山とほぼ同様の農兵論を、改革の切札として提出してくるのも、蕃山を模倣したというのではなく、徂徠なりの必然的を持っていた。

徂徠は、農兵制の利益について、次のように述べている。「武家田舎に居住するときは、第一衣食住に物いらぬゆえ、武家の人々の身上直るべし。

「……」野広く方々駆け歩きて、手足も丈夫になるべし。「……」平生ひまなれば、武芸ならびに学問も、外のなぐさみなければ、江戸より良かるべし。家来も田地五石目・十石目取らせても作り取りにさするゆえ、五石は十石になり、十石は二十石になるなり。<sup>32)</sup>」ここで述べられているのは、主として、武士の帰農の経済的利益である。まず、消費支出が減る。そして、家来への俸給支出も、田舎で五石の収量のある田地を与えれば、5割の税率を前提とすると、城下で十石の知行地を与えたのと同じになり、節約になる。

蕃山が経済的利益に次いで重視したと思われる、武士の帰農の軍事上の利益について、徂徠はあまり関心を払っていないように見受けられる。確かに、「武芸ならびに学問も」という言葉があるが、これは、蕃山の「文武の芸」とは、少しニュアンスが異なるようだ。むしろ、徂徠の場合、経済的利益に次ぐ、武士の帰農のもうひとつの利益は、政治上の利益だった。つまり、「武家田舎に住めば、田地の様子、川除け〔河川工事〕等のことも見習らい、聞き習らいするゆえ、御役仰せ付けられて地方御代官にまかりなりても、江戸出生の者ども手代任せにするとは雲泥の違いなるべし<sup>33)</sup>」といった、田舎での行政官としての手腕の向上という利益。また、「昔は在々に武家満ちたれば、百姓もわがままならず<sup>34)</sup>」といった事態を改善し、「田舎の締まり<sup>35)</sup>」を付ける、田舎での治安警察官としての役割の向上という利益である。こうした蕃山と徂徠の違いは、蕃山が武士を政治家であると同時に軍人であると認識していたのに対し、徂徠が武士を何よりも政治家であると認識していたことを示すものであろう。

### 3

しかし、そうした、蕃山の農兵論と、徂徠の農兵論との相違は、さほど大きなものではない。両者の最大の相違は、農兵改革の犠牲者が誰かとい

う点にある。蕃山の場合、犠牲者を出さない改革が構想されながら、実際には、10分の1税という理想を実現するため、武士が犠牲にならざるをえない関係にあった。徂徠の場合、10分の1税というような理想は、もはや一顧だにされてはいない。徂徠にとって、そのような理想は、非現実的きわまるものであったろう。蕃山の時代に倍加して、武士の困窮はいよいよひどく、事態は切迫していた。武士を困窮から救うためには、犠牲は止むをえないと、徂徠は考える。その犠牲とは、改めて言うまでもなく、商人であった。

蕃山の農兵論が、必ずしも抑商的でなかったことは、すでに述べた。これに対して、徂徠の農兵論は、強い抑商的性格を持っていた。徂徠には、商人というものは、とかく奸計や詐欺によって、利を欲しいままにするもの、という先入観があったらしい。「武士の知行はみな商人に吸い取らるなり」<sup>36)</sup>といった発言に見られるように、徂徠は、武士の窮乏を、武士と商人との階級対立の表現として把握する傾向が強い。つまり、徂徠の場合、農民に寄生して生活する武士の窮乏化が、商人の武士への寄生の結果とみなされるわけである。徂徠の商人に対する見方は、そうした階級的利害の観点によって、かなりゆがんでいる。

たとえば、徂徠の次の発言である。「商人盛んになれば、商人の心は職人・百姓とは違い、本骨折らずして座りながら利を儲くる者なるが、なおまた上手になりて、商をせずしてただ口米〔こうまい、手数料〕を取りて渡世をする仕方を工夫して、その筋近頃ますます上手になり、仲間〔同業組合〕を立て、党を組み、元締めとなりて、いながら渡世をせんとするゆえ、掛かりいよいよ莫大になりて、物の値段下らず。」<sup>37)</sup>ここでは、徂徠は、商業利潤を発見する道を自ら閉ざしているし、より進んだ商取引の機能の把握に失敗していると言わざるをえない。それも、彼の、商人憎悪と呼ぶべき感情による。

このような観点から、徂徠の農兵論は、抑商の役割をも担うものとして

提唱されている。徂徠は言う。「武家知行所に居住するときは、家居には所  
の木を切りて作り、米は年貢米を用い、味噌豆も処に生ずる、衣服は織り  
て着る。衣食住に物いる事なし。〔……〕されば米を売りて金にする事はい  
らぬことなり。〔……〕米をみだりに売らず、武家にしめ置くときは、商人  
も金を米にせずしてならぬゆえ、商人ことのほか迷惑して、諸色の値段は  
心のままに下るべし。これは主客の勢いというものなり。当時は旅宿の境  
界なるゆえ、金無くてはならぬゆえ、米を売りて金にして、商人より物を  
買って日々を送ることなれば、商人主となりて武家は客なり。ゆえに諸色  
の値段、武家の心ままにならぬ事なり。武家皆知行処に住するときは、米  
を売らずに事すむゆえ、商人米を欲しがる事なれば、武家主となりて商人  
客なり。されば諸色の値段は武家の心ままになる事なり。」<sup>38)</sup>このように、  
徂徠の農兵論では、武士の帰農は、抑商の有効な手段でもあったと考えられ  
ていたのである。

だから、徂徠の農兵論では、商人の犠牲は、止むをえざる犠牲である以  
上に、必要不可欠な犠牲であった。それゆえまた、『徂徠先生答問書』にお  
ける次の徂徠の言葉は、彼の農兵論との関連に限って言うなら、言葉だけ  
のものとならざるをえない。「農は田を耕して世界の人を養い。工は家器  
を作りて世界の人に使用せ。商は有無を通わして世界の人の手伝いをなし。  
士はこれを治めて乱れぬようにいたし候。各〔おのおの〕それぞれ自らの  
役をのみいたし候えども。相互いに助け合いて。一色欠け候いても国土は  
立ち申さず候。」<sup>39)</sup>

もちろん、徂徠が、「商人撲滅などということを考えていない」<sup>40)</sup>ことは、  
確かであろう。とは言え、徂徠が、商人を、原則論的にはともかく、当時  
の時代状況を背景に置いて見るとき、明確に武士階級に敵対するものとし  
て把握していることも、確かである。だからこそ、徂徠は『政談』の巻の  
二を次のような言葉で締め括ることになる。「〔……〕総じて商人は利倍を  
もって渡世とする者ゆえ、当時の有様にても、一夜検校にもなり、また一

日のうちに潰れもする者にて、これ元来不定なる渡世をする者ゆえなり。武家と百姓とは田地より外の渡世は無きて、常住の者なれば、ただ武家と百姓の常住に宜しき様にするを治の根本とすべし。商人は不定なる渡世をする者ゆえ、善悪右に言うがごとし。しからば商人の潰るることをば嘗てかまうまじきなり。これまた治道の大割の心得なりと知るべし。」<sup>41)</sup>このように、強い抑商的性格を持つことが、徂徠の農兵論の際立った特徴であった。

しかしながら、だからと言って、徂徠の農兵論が、蕃山のそれと比べ、より反動的なものだということになるわけではない。復古主義的反動という面では、蕃山の農兵論も徂徠のそれも、同様であろう。蕃山の農兵論に抑商性が弱く、徂徠のそれに抑商性が強いという相違は、両者の時代背景の相違による。徂徠の場合、商品経済の進展による武士の窮乏が切迫的であったから、蕃山の場合のような、犠牲者を出さない改革など、思いもよらないことだった。そして、蕃山よりも商品経済に関する経験的知識の豊富な徂徠が、商品経済を排撃しようとするとき、商品経済の最前線で活躍し、商品経済のるつぼの中から利益を引き出す商人が、主な排撃の対象となったことは、ある意味で自然なことであった。徂徠にとって、商人を排撃することは、農本商末思想の帰結というより、彼の時代観察から生ずる、当然の政治戦略であったろう。政治をモラルから切り離し、政治学を経験科学として確立したと評価される、徂徠によってこそ、商人の犠牲という代償が、モラルを越えて、大胆に選択されたのだとも言えよう。

## むすびにかえて

熊沢蕃山の農兵論は、10分の1税の実現を目指すという理想主義的性格ともあいまって、抑商的であることを免れ、かえって、若干の無理を承知で言うとするなら、抑土的なものになった。しかし、それは、かなり現実

味に乏しい議論だった。蕃山の農兵論に見られるこの非現実性は、蕃山の時代、商品経済の発達はまだそれほどではなく、武士の窮乏化もさほどは切迫していなかったことの反映であった。

これに対して、荻生徂徠の農兵論は、商品経済が速度を加えるように発達し、武士の窮乏化が大いに切迫していた状況を反映した。だから、それは、理想を追うよりも、現実打開的な性格を強く帯びていた。そのことが、反面、徂徠の農兵論の抑商的性格を、強く規定することにもなったのだった。

蕃山の農兵論にせよ、徂徠の農兵論にせよ、それらは、武士の帰農を主張するものである限り、自然経済への復帰を目指す一方、商品経済を、多かれ少なかれ、否定しようとするものであった。しかし、そうした点は、単に、農兵論が、商品経済を見失なっているというように、評価されてはならないのだった。むしろ、農兵論が、商品経済を否定しようとすることは、それが、商品経済を不十分ながらも見出し、だが、商品経済を意識的に遠ざけようとする関係を示している。そうした関係を通じて、農兵論は、自らの商品経済認識のありようを、示唆しているのである。

また、農兵論と重商主義論との意外な親近性も、注意されてよい。農兵論が後向きで、重商主義論が前向き、という時間軸の大きな相違からだろう、従来、両者の親近性については、注目されることが少なかった。しかし、農兵論も、重商主義論も、武士が、政治や軍事といった、言わば本業以外の業に従事してよいとする点では、同じ論理構造を持つ。だから、農兵論という先行思想があったことは、案外、後の時代に見られる、重商主義論の展開を容易にしたかも知れないとも、思われるわけである。

付け加えて言うと、徂徠の農兵論に典型的な抑商論は、結果的に、商人の立場からする経済思想史上の反発を招くことになった。たとえば、別稿<sup>42)</sup>で論じたことのある、石田梅岩や山片蟠桃による、商利肯定論の流れがそれである。梅岩や蟠桃の商利肯定論の課題は、何よりもまず、徂徠の議

論に代表される、商業排斥論、商利否定論に対して、アンチ・テーゼを提出するところにあった。彼らは、商人としての経験からばかりではなく、商利否定論に対抗し、商利を肯定する思想を打ち出すためにも、商品経済についての認識を一層深めていくことになる。

そういう、言わば、経済思想が前に進むための反面教師といった役割を演じたことを想起してみても、農兵論について学ぶことは、江戸期の経済思想全般をながめる上で、無駄なことではないと思われるのである。

なお、農兵論の系譜に連なる論者として、忘れることのできない存在である、太宰春台の経済思想については、別の機会に触れることにしたい。

注 1) この項の記述は、後藤陽一氏稿「熊沢蕃山の生涯と思想の形成」(『日本思想大系』第30巻、岩波書店、1971年)に、また、宮崎道生氏著『熊沢蕃山の研究』(思文閣出版、1990年)に、多くを負っている。

2) 熊沢蕃山『大学惑問』(『日本思想大系』第30巻) 417頁。

3) 同上、417～418頁。

4) 同上、418～419頁。

5) 山鹿素行にも、貨幣を媒介にした、農工商三民による社会的分業という認識はあったが、それは、自律性を持った商品経済という認識とはほど遠いものだった。以下にあげるふたつの発言に見られるように、素行の場合、農工商の三民によって営まれる経済は、士の支配する政治の一部として、把握されてしまうからである。

「三民ともに起こるといえども、己れが欲を専らにして、農は業に怠りて養を全くせんことを欲し、あるいは弱をしのぎ少を侮り、百工は器を疎〔おろそか〕にして利の高からんことを欲し、商賈は利をほしいままにして奸曲をかまう。これみな己れが欲をほしいままにしてその節を知らず。盜賊争論やむことなく、その氣質のままにして人倫の大礼を失するがゆえ、人君を立ててその命を受くところとし、教化風俗のよるところとす。しかれば人君は天下万民のためにその極みを立てたるゆえんにして、人君己れが私するところにあらざるなり。これ士農工商の起こるところ、天下の制用全きところというべし。」『山鹿語類』(広瀬豊編『山鹿素行全集』第4巻、岩波書店、1941年) 290頁。

「これまた天下の万民各〔おのおの〕なくんばあるべからざるの人倫なりといえども、農工商はその職業に暇〔いとま〕あらざるをもって、常住あい従いてその道を尽くすことを得ず。士は農工商の業をさし置いてこの



道を専らつとめ、三民の間いやしくも人倫をみだらん輩をばすみやかに罰して、もって天下に天倫の正しきを待つ。これ土に文武の徳備わらずんばあるべからず。」『山鹿語類』（『日本思想大系』第32巻，岩波書店，1970年）32頁。

- 6) 熊沢蕃山『大学惑問』440頁。
- 7) 宮崎道夫，上掲，402頁。
- 8) 折原裕「江戸期における重商主義論の成立——海保青陵と本多利明——」（『敬愛大学・研究論集』第43号，1993年3月，および，折原裕「江戸期における重商主義論の展開——佐藤信淵と横井小楠——」（『敬愛大学・研究論集』第44号，1993年9月。
- 9) 熊沢蕃山『集義和書』（『日本思想大系』第30巻）147頁。
- 10) 同上，249頁。
- 11) 同上，249頁。
- 12) 同上，249頁。
- 13) 熊沢蕃山，『集義外書』（政宗敦夫編『増訂・蕃山全集』第2巻，名著出版，1978年）156頁。
- 14) 衣笠安喜『近世儒学思想史の研究』（法政大学出版局，1976年）85頁。
- 15) 宮崎道夫，上掲，403頁。
- 16) 松浦玲「文明の衝突と儒者の立場——日本における儒教型理想主義の終焉（三）——」（『思想』1973年10月）56頁。
- 17) 熊沢蕃山『集義外書』166頁。
- 18) 熊沢蕃山『大学惑問』443頁。
- 19) 松浦玲，上掲，53頁。
- 20) 尾藤正英『日本封建思想史研究——幕藩体制の原理と朱子学的思惟——』（青木書店，1961年）243頁。
- 21) 清水臥遊『熊沢了介先生事跡考』（谷口澄夫・宮崎道夫編『増訂・蕃山全集』第7巻，名著出版，1980年）360頁を参照。
- 22) 谷口澄夫『岡山藩政史の研究』（塙書房，1964年）384～389頁を参照。
- 23) この項の記述は，今中寛司氏の『徂徠学の史的研究』（思文閣出版，1992年）に多くを負っている。
- 24) 荻生徂徠『政談』（『日本思想大系』第36巻，岩波書店，1973年）263頁。
- 25) 同上，313～314頁。
- 26) 同上，314頁。
- 27) 同上，317頁。
- 28) 同上，317～318頁。
- 29) 同上，317頁。
- 30) 長尾龍一『大道廃れて——権力と人間に関する諸省察——』（木鐸社，1985年）135頁。

- 31) 川口浩『江戸時代の経済思想——「経済主体」の生成——』（勁草書房，1992年）207頁。
- 32) 荻生徂徠『政談』，298頁。
- 33) 同上，299頁。
- 34) 同上，296頁。
- 35) 同上，296頁。
- 36) 同上，306頁。
- 37) 同上，329頁。
- 38) 同上，344～345頁。
- 39) 荻生徂徠『徂徠先生答問書』（島田虔次編『荻生徂徠全集』第1巻，みすず書房，1973年）430頁。
- 40) 川口浩，上掲，163頁。
- 41) 荻生徂徠『政談』345頁。
- 42) 折原裕『江戸期における商利肯定論の形成——石田梅岩と山片蟠桃——』（敬愛大学・研究論集』第42号，1992年9月。